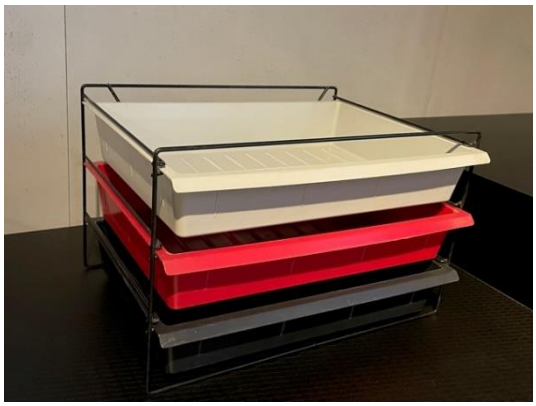
89 シャルロット・ペリアン（2021 年 11 月 25 日）



パリ装飾芸術美術館の現代作品の常設展示の一角にある「STEPH SIMON, LA GALERIE RIVE GAUCHE」と題したコーナーには、シャルロット・ペリアン（1903-1999）の作品が展示されています。シャルロット・ペリアンは、フランスを代表する建築家でありデザイナーですが、実は日本とも深い関係がある人物です。

ペリアンは、1927 年に 24 歳の若さで建築家のル・コルビュジエに実力を認められて彼の事務所に入りました。そこで 10 年間働いた後に、独立しました。そして、ペリアンは、日本の商工省から輸出工芸品の装飾芸術顧問として招かれて、1940 年から 1942 年まで日本に滞在しました。ペリアンを装飾芸術顧問に推薦したのは、ル・コルビュジエの事務所で一緒に働いた建築家の坂倉準三でした。1940 年は、大戦が激しさを増し、世界が混乱していた時代でした。しかも、枢軸国陣営の日本と連合国側のフランスは敵国でした。そのような世界情勢のときに、ペリアンは単身での訪日を決意しました。ドイツ国防軍がパリを占拠した 1940 年６月 14 日の翌 15 日に、ペリアンは船でマルセイユを出発しました。８月 21 日に神戸に到着し、神戸から汽車で東京へ行きました。

ペリアンが日本で見たものは、ヨーロッパの工芸品をモデルにした稚拙な模倣品でした。どのようにしたら、日本人が自分たちの伝統技術を活かして、新たなものを生み出すよう促すことができるのかと彼女は考えました。1941 年３月に、日本の老舗デパートである高島屋で「Séléction, Traditione et Création(選択・伝統・創造)」展を開催しました。ペリアンの指導の下で、日本の職人は、ヨーロッパのスタイルと日本の技術を見事に融合させた作品を発表し、展覧会は大成功を収めました。展覧会の後、日本での役目を終えたペリアンはニューヨークへ渡ろうとしましたが、太平洋戦争が勃発してアメリカ行きのビザが発給されなかったために日本に留め置かれ、1942 年にベトナムのハノイに行くことができました。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

1953 年から 1955 年にかけて、ペリアンは夫と娘とともに再び日本に滞在しました。日本滞在中に、ペリアンは「Ombre（影）」というタイトルの黒い椅子（写真左下）や「Nuage（雲）」という壁掛け棚（写真右下）を制作しました。1955 年に高島屋で二度目の展覧会「Proposition d’une synthèse des arts, Paris 1955, Le Corbusier, Fernand Léger, Charlotte Perriand（芸術の一体化の提案 -1955 年のパリ- ル・コルビュジエ、フェルナン・レジェ、シャルロット・ペリアンの三人展）」を開催しました。壁掛け棚「雲」は、その展覧会に出品された作品です。

ペリアンのシンプルで機能的な家具やインテリアは、日本人デザイナーに影響を与え、日本の戦後のデザインの近代化に大きく貢献しました。

パリ装飾芸術美術館（仏語と英語のみ）
https://madparis.fr/ （仏語）
https://madparis.fr/en/（英語）

「Steph Simon, la galerie Rive gauche」について
https://madparis.fr/francais/musees/musee-des-arts-decoratifs/parcours/moderne-et-contemporain/steph-simon-la-galerie-rive-gauche/（仏語）
https://madparis.fr/en/museums/musee-des-arts-decoratifs/itinerary/design-collections/steph-simon-the-galerie-rive-gauche/（英語）